

あしよろ・ハードサポート通信

朝晩の冷え込みが日に日に厳しくなって日照時間も短くなり、気がつけば今年もあとわずかとなりました。10月号ではPAG検査について取り上げましたが、今回は実際に繁殖成績が改善された場合のインパクトについての話題です。

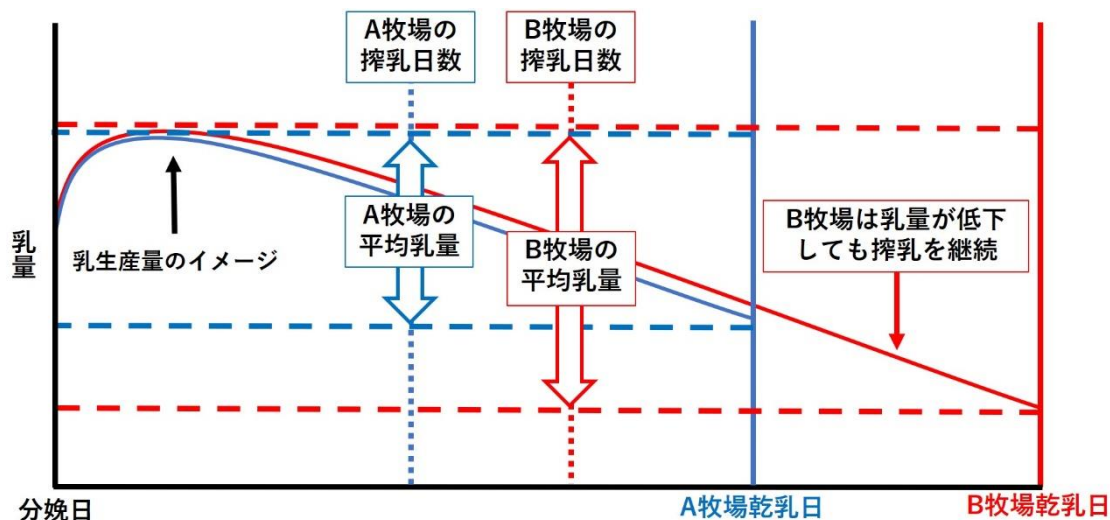
◆ まずは数を撃つことが大切

繁殖成績を良好に保つためには、まずは授精を行わなければなりません。初回授精時期に明確な目標を持つこと、再発情の観察やPAG検査を活用して不受胎の牛へ速やかに再授精すること、きちんと妊娠鑑定を行うことなどが大切です。授精の「数を撃つ」ことや分娩後は速やかに受胎させることを常に意識することが、牛群の分娩間隔短縮および繁殖成績改善への第一歩となります。



◆ 分娩間隔の短縮は乳生産効率を改善する

下の図では異なる二牧場でのイメージを示しており、二牧場とも牛群でのピーク乳量が変わりませんが、A牧場ではB牧場に比べて牛群の分娩間隔が短く、より早く乾乳になり次の分娩を迎えます。そのためA牧場では搾乳日数が短く、B牧場と比較すると牛群での平均乳量が高くなり、乳生産効率が良いことがわかります。一方B牧場では次の分娩を迎えるまでに時間がかかり、個体乳量が低下しても搾乳が継続され、乳生産効率が落ち牛群の平均乳量も低下してしまいます。

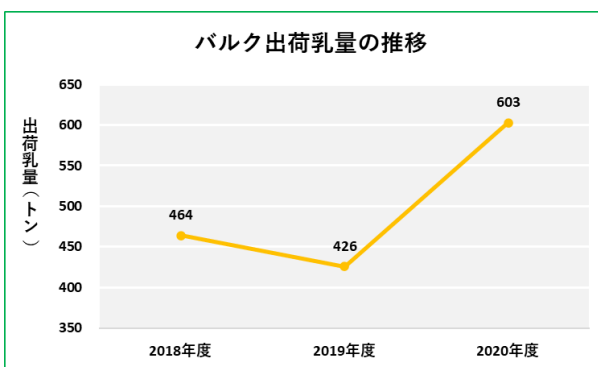


◆ 繁殖成績の改善は一年後に花が咲く

右の図では、ある牧場での乳検成績とバルク出荷乳量の推移を示しています。この牧場では元々繁殖成績が振るわず、周産期疾病も多発していました。そこで2018年途中より、初回授精日数と毎月の授精頭数の目標を定め、同時に周産期疾病コントロールにも取り組みました。2019年度には乳量の改善は見られなかったものの、初回授精平均と空胎日数平均が短縮されました。その結果、2020年度には絶えず毎月分娩があり、搾乳日数が短縮して個体乳量も増加し、バルク出荷乳量も大きく伸びています。繁殖面以外にも飼養管理や飼料給与内容の提案も行いましたが、頻度よく分娩予定を確保し、

乳検成績推移	2018年12月	2019年12月	2020年12月
経産牛頭数平均	61	55	59
搾乳牛頭数平均	52	46	52
搾乳日数平均	203	196	182
年間個体乳量平均	28.3	27.8	32.7
1頭当り年間乳量	8,877	8,565	10,658
初回授精平均	96	78	74
空胎日数平均	188	163	169
分娩間隔予定平均	480	433	450

分娩後の立ち上がりも良好だったことが乳量増の一番の要因と考えられます。現在この牧場では繁殖成績にまだ伸びしろがありますので、2020年途中からはPAG検査も開始してさらなる改善に取り組んでいます。このように繁殖成績の改善は取り組んでから結果が出るまでに少しタイムラグがありますが、根気よく授精を行いコツコツと先々の分娩予定を稼いでいくことで牧場に好影響をもたらします。



◆ 負のスパイラルから上昇気流へ

繁殖成績が改善したときに、牧場へもたらされる好影響は乳生産効率や出荷乳量の増加のみではありません。分娩後早期に受胎させることにより、牛が過肥になる前に乾乳期を迎えられる可能性が高まるので、次回分娩する際の周産期疾病のリスクを抑えることにつながります。また年間の分娩頭数自体が増えるので、授精戦略によって後継牛在庫を確保するチャンスが増えます。しかし、これらは逆に繁殖成績



が悪化すると牛群が「負のスパイラル」に陥ることも示しています。結果が出るまで時間がかかるものであるからこそ、日々の積み重ねがとても大切なのが繁殖です。牛群が常に「上昇気流」に乗ってられるようにするためにも、まずは「数を撃つ」ことからスタートしてみましよう。

(市川雷太)